



TITLE:

# <研究論文>児童養護施設職員の語りから支援モデルの構成へ：実践を捉える基本枠組みモデルの提示

AUTHOR(S):

高橋, 菜穂子

---

CITATION:

高橋, 菜穂子. <研究論文>児童養護施設職員の語りから支援モデルの構成へ：実践を捉える基本枠組みモデルの提示. 教育方法の探究 2012, 15: 25-32

ISSUE DATE:

2012-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190391>

RIGHT:

## 児童養護施設職員の語りから支援モデルの構成へ

### —実践を捉える基本枠組みモデルの提示—

高橋菜穂子

#### 1. 児童養護施設職員の語りをとらえる視点—ナラティブ・アプローチの意義

児童養護施設は、長い歴史を持つ施設であり、その多くは孤児院、養育院として、孤児や貧困児童、棄児の保護・養育からスタートしている。その後、社会的なニーズの変容により、現在は、養育の困難や不適切な養育、あるいは親からの虐待等の事由により、家庭で暮らすことがかなわない子どもの保護・養育を行い、かつその子らの自立を支援するための施設として位置付けられている。施設に求められる機能が世相を反映しながら、変遷、あるいは重層化したことに伴い、施設における支援のありかたも問い直され続けてきた。

しかし、関係者の関心は、この間、設置基準の見直しや施設の小規模化に代表されるように「ハードウェア」的なものに集中し、「ソフトウェア」的なもの、すなわち、実践の質に向けられることは必ずしもなかった(北川, 2009)。実践に焦点を当てるとしても、アセスメントに基づく支援計画の作成と実践というように、あらかじめ専門家が枠組みを想定し、その中での支援のプロセスを追うものが一般的である。

他方、現実に即した支援のありかたをとらえようとするなら、そのようなトップダウン的な視点ではとらえきれない、臨床や、具体的実践のありかたを、現場の当事者の視点から明らかにしようとするアプローチが必要となる。

Moses(2000)は、職員が子どもに与える影響の大きさにもかかわらず、職員の実践に光を当てるような研究は少ないと述べ、この原因について、児童養護の実践が、孤児への家庭代替的な支援から、被虐待体験やデプリヴェーションへのケアを中心とした医療モデルへと変遷したため、職員の役割が心理療法等医療的

ケアの専門家ではない、補助的な役割としてとらえられているからであると述べている。

しかし、子どもへの支援は、個別セラピー等、治療的アプローチから達成されるというよりも、日常を通して子どもと関わり、入所から退所まで一貫してそばで支え続けるような職員と子どもの関係基盤から達成されるものである。そのため、もっとも豊かな実践への示唆を与えてくれるであろう存在は職員であり、ミクロなレベルの子どもと職員の相互作用や職員の実践の質を、彼らの語りから検討することが重要であると考ええる。

ここで有効と考えられるのは、質的研究と、質的研究の方法論の中核にあるナラティブ・アプローチ(やまだ, 2006)である。質的研究の意義は、実践者から物の見方を生産できること(田垣, 2008)であり、人びと自身の表現や行為を立脚点として、それを人びとが、生きている地域的な文脈と結びつけて理解しようとする(フリック, 2002/1995)という特徴をもつ。やまだ(2006)は、質的研究の定義を、「広義の言語によって記述される研究」とし、そのような経験世界に対するアプローチの変革の中心には、ナラティブ・ターンと呼ばれる認識論的転回があるとする。

ナラティブとは、「広義の言語によって語る行為と語られたもの(やまだ, 2007)」を指し、实在概念から関係概念へと向かう大きな認識論的転回に基づくものである。人が自らの経験をどのように組織立てるのかに着目し、他者や、特定の時間・空間をもつ場所との相互関係を前提として、全体的な文脈の中で人びとが生きる世界に接近しようとするアプローチである。以下では、やまだ(2000, 2006, 2007)にまとめられているナラティブ・アプローチの特徴を手掛かりとしながら、

本稿で特に重要と思われるナラティブ・アプローチの特徴を、「生きられた経験としての意味への着目」、「社会・文化・歴史的な文脈の中で生きる人々」、「重層的な時間軸に根ざした意味づけの理解」という3つに分けて説明する。

### (1) 生きられた経験としての意味への着目

ナラティブ的なものの見方は、自然科学パラダイムに代表される論理実証モードと区別され(ブルーナー, 1998/1986)、種々の複雑な文脈の中で、人と人との関係性を通じて、人が己の体験をどのように意味づけているのかをとらえようとする。それは、研究対象となる人びとの生きられた経験を理解しようとするアプローチである。

論理実証モードでは、「それは事実かどうか？」という問い方を前提とするが、ナラティブ・モードでは、「2 つ以上の出来事が、どのように関係づけられて陳述されるか？」が問われ、出来事がどのような意味連関でむすびつけられるかが問われる(やまだ, 2000)。この「むすび」方(やまだ, 2007)によって、意味が変容したり、新しい意味が生まれることは、物語の「生成的定義(やまだ, 2007)」とされ、物語にとって本質的に重要と考えられる。

ナラティブ・アプローチはソーシャルワークの専門性において抜本的な変容をもたらしている(野口, 2005)。特に、クライアントや実践家が生きる世界を、当事者である彼ら以上に知っている人はいないという認識に立ち、支援実践の展開において、福祉政策によって枠組みをあらかじめ用意するのではなく、当事者の自由な語りを通じて生きる世界を共有し、そこから彼らを理解し、支援のありかたを模索するという方向を目指すという点が重要であろう。ここで重要なのは、実践家の支援を正しいか正しくないかとみる視点ではなく、彼らの生きられた経験を共有し、出来事を意味づけるその「むすび」方(やまだ, 2007)に着目することで、新たな実践の展望を見出そうとする生成的な視点であろう。

### (2) 社会・文化・歴史的な文脈の中で生きる人々

ナラティブ・アプローチの関心は、文脈から独立した「個人」ではなく、社会・文化・歴史的な文脈の中での、人々の生きられた経験に光をあてることにある(やまだ, 2008)。ここで着目するのは、誰かが位置を占

め、そこで出来事が生起する、特定の位置(locality)であり、これは、やまだ(1997)が「現場(フィールド)」の定義として示した、「複雑多岐の要因が連関する全体的・統合的場」と通底する概念であろう。人間と、人間をとりまく外部の環境が区別された従来の心理学モデルに対し、ここでの人間観は、特定の時間、空間をもつ場所、自然・文化・社会・歴史的・状況的文脈として具体化された環境や、そこで生きる他者との相互行為を前提する(やまだ, 2007)。

そのため、質的研究は、具体的な事例を重視し、それを文化・社会・時間的文脈のなかでとらえようとし、人びとの行為や語りを、その人びとが生きている現場のなかで理解しようとするものである(やまだ, 2006)。本稿で着目するのは、誰でもいつでも同じように繰り返し起こる反復現象というよりも、児童養護施設という現場の中で、語り手が経験する個人的で一回起的な出来事である。しかし、そこでの語りへの接近では、個人の語りの背景の社会的構図を念頭に置いた語りの解釈が必須となる。個人の意味づけの背景には、その人を取り囲む諸条件が控えている。その条件に含まれるのは、目に見え手に触れられるような物や人物ばかりではなく、「言説(ディスコース)」と呼ばれる<語り>の枠組みや社会・文化的に共有される解釈の視点などもまた見落とすわけにはいかない(能智, 2006)。

よって、一回起的でローカルな語りに着目しながらも、同時に、その生きられた経験が、特定の空間的・歴史的・文化的な文脈を超えて、深く社会・文化的物語とコミットしているかという点に関心を払う。

### (3) 重層的な時間軸に根ざした意味づけの理解

インタビューの語りは、「現前にはない(過去あるいは未来の)出来事」に対する「現在の語り」に焦点があてられるが、それらの出来事は語りの中で「現在」と照合され、絶えず再編成され、変容する(やまだ, 2000)。

ここで扱う職員の経験とは、語ることによって現在から過去を、あるいは現在から未来をまなざし、彼らが現在において捉えなおされたもの(西村, 2001)であり、クロノジカルな時間とは異なり、逆行したり、回帰したり、循環したり、止まったり、さまざまな流れ方をする(やまだ, 2000)。

彼らが現場で生きてきた長期的な時間を視野にいれながら、そこで絶え間なく編成される語りに寄り添

うことで、彼らが過去の体験を、現在直面している課題とのかかわりの中で意味づけた語りや、現在の葛藤から将来の展望や見通しを生み出すような語りを捉えることが可能になる。そのような語りから、彼らが実践をまなざす多元的な時間軸を捉え、その中で物語の、ゆらぎや変化プロセスを捉えることが可能となる。それは、実践家の、細分化されマニュアル化された役割や規範に対して、新しい実践知を切り拓く可能性を持つであろう。

## 2. 現場の語りからモデル構成へ

### (1) ソーシャルワーク研究における一般化への方策

質的研究を方法論として採用することは、ソーシャルワークにおける「個性性の尊重」という理念に照らしても有意義である。ただし、ここには常にパラダイムか実利かという問題(Shaw and Gould, 2001)、あるいは実用性と科学性の間のバランスという問題(渡部, 2009)がつきまとう。

ソーシャルワークは等しくクライアントのよりよい支援という方向性を持つものであるが、支援の対象となる人々が生きる現実が多様であり、抱える問題もそれぞれに異なるため、十把一絡げの理論が通用することはない。そのため、長く「理論的な裏づけがなくとも、日々の実践で積み上げ役に立つと判断したことを実践していればいいのだ」というような安直な経験至上主義と結びついてきた。よって個別事例の記述の蓄積はあるものの、それらを相互に突き合わせたり、発展させるような試みが必ずしも多いわけではない。

普遍的な解決策がないからこそ、個々のケースで得られた知見の積み重ねが必要であり、個別事例でなされたプロセスが他の事例に援用される道筋を探ることや、実践をオープンな対話に開かれたものとして、議論の俎上にのせていくことが重要であろう。

上記のような経験主義を乗り越えるためには、個別具体的なソーシャルワークの実践を、いかにして個々の事例を超え共有し、実践の改善に向けた理論化、あるいは一般化を行うのかという問題が浮上する。

田垣(2008)は、多様な現実を生きる人々に対する支援を研究する際に求められる科学性とは、あるテーマを考えるうえでの枠組みや見方を、単なる感覚ではなく、徹底的に言語化することによって、実践の通底に

なるような思考を人々に提供することであるとする。Smith(2004)は、同じ実践モデルをすべてのクライアントに応用するのではなく、根拠のある実践方法を知っていることとともに、その応用に関してクライアントの固有性を考慮してどのように用いることができるかを実践家が判断することであると述べる。ここでは、絶対的で普遍的な対処法を見出すことではなく、あるいは個々の実践家の感覚的な判断のみを重視しそこにとどまるのでもなく、実践家が個々の事例に応じて判断できるだけの、ものの見方や枠組みを提示することが目指されていると言えよう。

### (2) モデル構成とは

やまだ(2007)は、質的研究は「個性記述的研究」や「主観的研究」とは異なり、何らかの一般化を目指すべきだと述べ、質的研究における一般化への、有効な方策として「モデル構成」を挙げる。モデルとは、「現象を相互に関連づけ、包括的にまとめたイメージを示すと共に、そのイメージによって新たな知活動を生成していくシステム(やまだ・山田, 2009)」と定義される。やまだのモデル構成の方法論は、「モデル構成的現場心理学の方法論(1997)に論を発し、以後、方法論の再構成を繰り返しながら生成的に発展している(やまだ, 2001: やまだ・山田, 2009 など)。西條(2002)は、やまだのモデル構成の意義として「曖昧な記述に終始しかねない質的研究に「モデル」という検証可能な実態を与え、個性記述で終わりがかねない質的研究を、モデルに基づき一般化を目指すものとして位置付けることが可能となった」ことをあげる。

モデルが質的研究における一般化方策として有効である根拠として、モデルが生み出すイメージによる新たな知活動の生成的な発展が挙げられる。やまだ・山田(2009)は、モデルは、その基にある現場データと対話するだけでなく、多種のモデル相互間で対話することにより、元のモデルが修正されたり、よりメタレベルのモデルが生成されることが重要であり、それによりイメージからイメージへの比喩的移行や生成的増殖を生みやすい(やまだ, 2001)とする。西條(2003)は、やまだのこの提言について、「ミメシスという概念を基軸とした新たな一般化への道につながるもの」であると指摘する。

加えて、モデルはできるだけ個別具体的な事象を捨

象せずに、それらを組み込んだものにすることが望ましい。矢守(2006)は、あるローカリティにおける特殊具体的な事情は、別のローカリティにインターローカルに移転・転用しやすく、特殊具体的な要素は別のローカリティにおける別の要素で置換、補填しやすいと述べる。児童養護施設における実践においても、例えば、他の社会資源との協働における職員の葛藤や、子どもの自立をめぐる試行錯誤など、生の語りを生かして、できるだけ現場の現実性に沿って描き出すモデルを積み重ねるべきである。それらは、別の領域(例えば、問題を抱える家族への支援や、児童養護施設とは異なる施設形態の福祉施設における支援など)の実践へとインターローカルに接続される可能性を有していると考えられる。

### (3) 本稿の目的

ここまで、ナラティブ・アプローチによって児童養護施設職員の語りをとらえる意義、さらに、それらを一般化可能なモデルとして提示する方法論としてのモデル構成の意義を確認した。さらに本稿では、児童養護施設における実践をとらえる枠組みとして、やまだ(1997, 2001)、やまだ・山田(2009)の「モデル構成的現場心理学の方法論」に基づき、現場の具体性を保持しながらも、先行モデルや既存の概念との関連を重視したモデル構成の具体的なプロセスを提示する。本研究は、児童養護実践における一連の研究を位置づける方法論的視座を確認することが最終的な目的であるが、ここでは特に、研究の全体図を位置づける座標軸として、基本枠組みモデル(3章で詳しく説明)を提示することを目的とする。

## 3. モデル構成プロセス

### (1) モデル構成的現場心理学の方法論

モデル構成的現場心理学の方法論においては、現場の生データからボトムアップに基本要素を抽出するプロセスと、既存の概念や、先行するモデルからトップダウンに基本枠組みを構成するプロセスが循環的に組み合わせられ、基本要素と基本枠組みが包括的に関連付けられることで、より現場の現実性に合致した基本構図モデルが構成される。

ここでは、抽象度の異なる多種のモデルを対話的に往還させることによって、個々のイメージ形態を、よ

り大きな変化プロセスの一部として位置づけ、意味づけるモデルを構成することが出来る(やまだ, 2001)。ここで扱う水準の異なるモデルは以下の3つである。

①**基本枠組みモデル**：基本枠組みモデルは、基本構図を包括的に位置づける座標軸となる。基本構図を成立させる前提となる枠組み、骨格、構造に当たる部分であり、基本構図の書き方を決める額縁でもある。

②**基本要素**：基本要素は、個々の現場データの具体的なイメージから、その要素をとりだしてまとめたものである。個々の人々が描いた生のイメージ形態にもっとも近く、ローデータを直に反映したモデルである。

③**基本構図モデル**：このモデルは、基本枠組みモデルと、基本要素との往還によって構成される両者の媒介モデルである。基本骨格となる基本枠組みモデルに沿って基本要素を整理・配置し、職員の支援実践の具体像を検討する中で明らかになった視点に基づき、基本構図モデルが構成される。これは、あらゆる現象に適用できる代わりに現実とは乖離する抽象モデルではなく、また無限に多様な具体的現実をここに写實的に写し取る具象モデルでもなく、具体的現象をできるだけ単純化しながら具体性を保持するための必要最小限の有意味情報を含むモデルである

### (2) 本稿のモデル構成プロセス

本稿のモデル構成は、水準の異なるモデルを往還するプロセス、すなわち、先行研究における既存の枠組みから本稿の基本枠組みモデルを練り上げるプロセス(第1段階)と、現場の語りデータから基本要素を抽出し、基本枠組みモデルとを往還しながら基本構図モデルを構成するプロセス(第2段階)から成る。一連のモデル構成プロセスは図1のように位置付けられる。

さらに、本稿では、語りの中に含まれる具体事例を、基本構図モデルにそって描き、そこで展開される支援のあり方を明らかにする、個別事例の検討というプロセスを置く(図2)。このプロセスは上述したソーシャルワーク実践における、実用性と科学性のバランスの問題に対する1つの解決方策となりうると考える。臨床や福祉など対人援助の現場における実践それ自体は、多くの不確かな要因の複雑なネットワークからなり、決して直線的な因果関係だけで捉えるものではない。そのため、現場から構成したモデルも、個々の事例と突き合わせ、さらに、事例から発見したことをもとに

モデルを生成的に変容させるなどの、往還プロセスが重要であると考える。

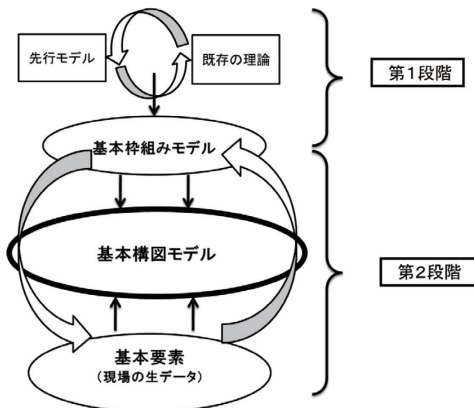


図1. 本研究のモデル構成プロセス

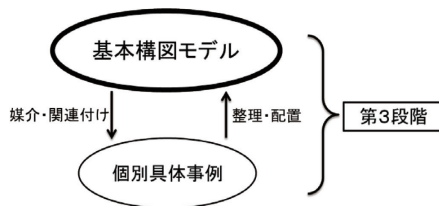


図2. 個別事例の検討プロセス

### (3) 基本枠組みモデルの提示

ここからは、上記のプロセスの中で、今後の研究の方向を示す座標軸となる基本枠組みモデルの構成プロセス(図1の第1段階にあたる)を提示する。

これは、先行モデルや既存の概念から、本研究の基本骨格である「基本枠組みモデル」を練り上げるプロセスを指す。ここでは以下のモデルを参考にし、児童養護の実践をとらえる枠組みを考えてみたい。

#### ① 入れ子モデル

やまだ(1988, 2009)は、「人やものの運動や移動や出来事が起こる領域」、「人やものを関係づける基盤」として場所を定義し、場所の中に位置づけられた人間像の把握のしかたを提唱している。そして、「場所」概念を基底にした「入れ子モデル」を用いてさまざまな人間現象の把握を試みている。やまだ(2009)によれば、場所は、より大きな場所の中に含まれ、その場所はさ

らに大きな場所のなかに含まれるという幾重もの包含関係構造をもち、人間はその中に位置づけられる中身として定義される。そのため場所は、人間を取り巻く関係の網目や文脈をも内包する概念である。「入れ子モデル」は、そのような場所概念を基底として人間を取り巻く現象をとらえようとしたものである。

上述のように、本稿は、社会・文化・歴史的な文脈の中で生きる人々の実践のありようを明らかにするという関心をもつ。そのため、施設という「ハードウェア」のみへの関心を脱し、施設という場で生きる当事者がどのような実践を行っているのか、そのダイナミクスを明確にする必要がある。そこで、場所に埋め込まれた人間の動きに焦点を当てる必要がある。児童養護施設や、それを取りまく社会資源と子どものつながりが生起する場としての場所を描くことを試み、さらに、人びとを取り巻く世界全体を、さまざまな支援基盤との対話的場所によって構成される「入れ子」として描くことを試みる。

#### ② 異なる社会資源のつながりを含んだ支援

ここではより具体的に、児童養護施設という場で起こる実践のありようととらえるうえでの重要な視点を論じ、それをモデルにいかに関り込んでいくのかを、先行モデルとの関わりから述べる。

子どもの施設入所措置は、親の同意、もしくは家庭裁判所の協議を経たのち、児童相談所の支援方針の決定によって決まり、支援のプロセスでは、児童相談所の協議による支援方針を中心としながら、各種福祉、教育、医療機関等がそれぞれ支援役割を担っていく。

厚生労働省雇用均等・児童家庭局(2007)がまとめた「支援プロセスイメージ」によれば、さまざまな機関がその支援に関わっている。必要な支援を行うためのアセスメント、ケアプランの作成児童相談所、日常生活における支援を担う施設、子どもへの教育を担う学校など、多重の場所が関連しながら子どもへの支援にあたっている。そのため、社会的養護に関する関係機関等の役割分担と機能強化及び地域ネットワークの確立が急務であると指摘されている。多面的なケアが求められる社会的養護の日常的支援実践は、個々の福祉施設単独で担いきれるものではなく、社会全体が協力し子どもの育ちを見守っていく姿勢が求められており、協働的な支援実践の構築が緊急課題となっている

(Milligan & Stevens, 2006 ; Smith, 2009)。

つなぐを生みだす実践に着目した研究として、下山(1997)が、関係概念を主軸とする臨床援助モデルとして提唱した<つなぎ援助モデル>があり、さらに、それをより日常的かつ広い範囲をカバーする援助モデルとして援用した谷口(2004, 2006)の「病院内学級のつなぎ援助モデル」がある。谷口は、生活世界が分断されてしまいがちな病院内学級の子どもたちに対して、病院内学級の教師が行っている実践を<つなぎ援助>モデルとしてまとめている(図3)。ここでは、子どもの生態システムを有機的につなごうとする実践の様子が示されているが、実際の生活世界と、自分が本来いべき家庭とが分断され不安定な状況に置かれている児童養護施設の子どもへの支援においても、谷口の示す「つなぎ援助モデル」は実践の理解に有効であると考えられる。

### ③ 子どもの生涯発達を見据えた支援

また、児童養護の実践をとらえる上で重要となる視点は、入所児童の生涯発達を見据えたうえで、その自立を保障するという問題である。1997年の児童福祉法改正に伴い、「保護から自立支援へ」と児童福祉法の基本理念が転換した。自立支援は、施設の方向性を貫く目標として位置づけられており、すべての機能のゴールがこれに向けて設定されなければならない。しかしこれまで、児童養護施設における自立支援は、退所を境にした短期的なパースペクティブにおいてその実践がとらえられてきた。自立支援は単に施設退所による移行期間に焦点を当てたものではなく、施設に入所している期間から始まり、施設を出た後、退所者が真に心理的・社会的な安定を築くことができるまでを見据えた、長期的な想定のもとに行われる支援を指すものである (Propp, Ortega, & Newheart, 2003)。

児童養護の実践をとらえる視点のなかに子どもの生涯発達軸を組み込み、子どもの退所後の生を見通した時に、いかなる支援が展開されているのか明らかにすることが求められるのみならず、退所後の生活をするように支えるのかということを見据えた支援が求められる。このような、子どもの生涯発達を視野に入れた支援の枠組みとして、ここでは、社会的養護のもとで生きる子どもへの支援のネットワークを、横軸のネットワーク(子どもの生活圏における直接的支援)と、

縦軸のネットワーク(ライフステージそれぞれの段階に応じた支援プロセス)という2つの軸からなるとした小木曾(2002)の子どもの援助ネットワークモデルを参考にした。

以上より主に3つの先行モデルを参考にし、図3のように、児童養護施設における支援モデルの基本枠組みモデルを構成した。

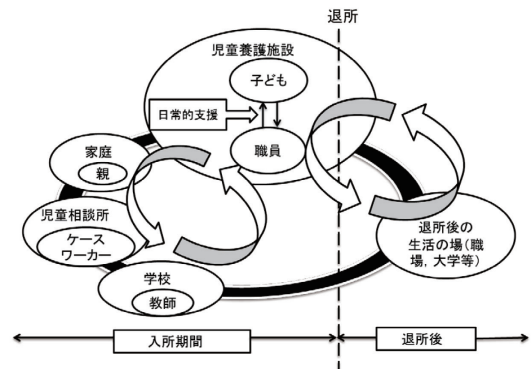


図.3 児童養護施設における支援の基本枠組みモデル

### (4) 基本枠組みモデルの説明

上記の基本枠組みモデルの特徴として以下の3点が挙げられる。

第1に、このモデルは、社会的・歴史的文脈をもつ場所に埋め込まれた子どもと支援者のダイナミクスに焦点を当てる。そのため、児童養護施設とそれを取りまく社会資源の中に、入れ子構造としてその場に生きる成員を示した。具体的には、子どもを取り巻く重要な社会資源として、児童養護施設、家庭、児童相談所、学校を、さらに、それぞれの場で子どもへの支援を行う成員として職員、親、ケースワーカー(以下 CW)、教師をあげ、それらがつながりを保ち連関している様子を二重線で示した。また、人々の双方向的な対話性を基盤とした双方向的なかわりを強調するため、支援の方向は一方方向ではなく、双方向的なものとする。そのため、一方方向の矢印ではなく、双方向の矢印を用いて支援の流れを示した。

第2に、このモデルは、ゆるやかな場所の連関としての「むすびつき」を描く。ここで示される社会資源の連関は、トップダウン的にマニュアル化され、固定されたつながりではなく、個々の実践において柔軟に

むすびつく協働のパフォーマンスというべきものである。従来の支援の枠組みにとらわれない、柔軟な再編や即興的な対話が生みだされる様子や、対話の変化プロセスを内包する対話的場所が生みだされる様子を描くことで、現場の支援のあり方を、固定化され、区画化されたものでなく、柔軟で即興的な協働としてとらえ直すものである。

第3に、本モデルは、円環的な時間軸を含んだモデルである。やまだ(2010)は、従来の直線的で一方的な時間概念に対して、循環する時間概念のイメージを提示している。時間展望が循環的であることは、そこで起こる変化プロセスへの着目が可能になり、そこで起こる喪失のプロセスも自然の移動の一環とみなされ、生成や再生のプロセスとむすびつけられることが可能となる(やまだ, 2010)。ここでも、子どもの生涯発達を見据えて、入所期間と退所後の時間軸が連関し、退所後も施設とつながりをもちながら新しい生活の場と接続していくような円環的な移行を示され、その中で子どもや職員の関係性の変化プロセスを追うことができると考えられる。

#### 4. 児童養護施設の実践に対するモデル構成の意義と課題

ここで、ナラティブ・アプローチ及びモデル構成によって実践をとらえることの意義と課題を確認しておきたい。

本稿で示した実践の一般化プロセスは、第1に現場で生きる子どもや職員の視点を取り入れるボトムアップのアプローチを行う点で意義深いと考えられる。これは、従来のソーシャルワーク研究において不足していた現場の声を取り入れるためのアプローチであり、支援主体となる職員の視点や子どもの視点をより現実に近い形で把握できるものである。そのため、現場の実践に根ざした研究を行うことが可能となる。

2点目に、児童養護施設で生きる子どもと、彼らを取り巻く職員やさまざまな社会資源とのむすびつきを見据えながら支援をとらえる点が挙げられる。本研究は、これまで見落とされてきた施設児童を取り巻くさまざまな関係機関(家庭、児童相談所、学校など)に着目し、これらとの連携を組み込んだモデルを提案する。生活世界が分断され不安定な心理に陥っている子どもへの

支援を行う中で、いかにそれぞれの関係機関が連携し、子どもの居場所を作り出すかという重層的な視点で支援をとらえ、現場の実践を規定する関係構造を組み込んだ支援の理解が可能となる。

3点目に、施設児童の生涯発達を見据えた支援モデルを提案する点が挙げられる。本研究ではこれまで、子どもが施設を退所する時点を境にして短期的な視点で論じられてきた自立支援について、子どもと職員の関係基盤を軸に、退所後の子どもの生を見据えながら長期的な視点で職員の実践をとらえるものである。これによって、職員と子どものむすびつきは、退所を境にして分断されるものとしてではなく、退所後も「帰ってこられる場」として円環的にむすびついていく。これは、施設児童の青年期やそれ以降のライフスパンを視野に入れた生涯発達のなパースペクティブからの支援モデルであると言えよう。

最後に、本稿の課題及び今後の研究展望を述べる。本稿で示した基本枠組みモデル(図3)は、現段階では、児童養護実践に関わる研究の一つの方法論的視座として提示されたにすぎない。このモデルは、今後、現場の語りデータと突き合わせるプロセスを経て、基本構図モデルへと展開される必要がある。

さらに、基本枠組みモデルは今後、各研究課題を統合するメタモデルとしても機能させる必要がある。基本枠組みモデルからとらえうる各研究課題をそれぞれ精緻化するプロセスを通して、また、多くの事例へと援用され生成的に発展するようなプロセスを通して、本稿で示した基本枠組みモデルもより現場の現実性に合致したものとして昇華されることが望まれる。

#### 文献

- ブルーナー, J. (1998). 可能世界の心理.(田中一彦, 訳).  
Bruner, J. S. (1986). *Actual minds, possible worlds*.  
Harvard University Press.
- フリック, U. (2002). 質的研究入門—〈人間科学〉のための方法論(小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子, 訳). 東京: 春秋社. (Flick, U. (1995). *Qualitative forschung*. Humburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH.)
- 北川清一.(2009). ソーシャルワーク研究における批判的分析の方法—児童養護施設実践を素材にして. ソ



- ーシャルワーク研究. 35(2). 50-56
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局.(2007). 今後目指すべき児童の社会的養護体制に関する構想検討会中間とりまとめ.  
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/05/s0529-5.html>  
 (情報取得 2012/3/1)
- Milligan, I. and Stevens, I. (2006). Residential Child Care : Collaborative Practice. London:SAGE.
- Moses, T. (2000). Why People Choose to Be Residential Child Care Workers. *Child and Yourth Care Forum.* 29, 2, 113-126.
- 西村ユミ(2001). 語りかける身体—看護ケアの現象学. 東京：ゆみる出版.
- 能智正博.(2006). “語り”と“ナラティヴ”のあいだ. 能智正博(編). <語り>と出会う—質的研究の新たな展開に向けて(pp. 11-72). 京都：ミネルヴァ書房.
- 野口裕二.(2005). ナラティヴの臨床社会学. 東京：勁草書房.
- 西條剛央.(2003). 「構造構成的質的心理学」の構築—モデル構成的現場心理学の発展的継承. 質的心理学研究, 2, 164-186.
- 小木曾宏.(2002). 虐待を受けた子どもの自立支援ネットワーク—その必要性と課題. 村井美紀・小林英義(編). 虐待を受けた子どもへの自立支援(pp. 105-129). 東京：中央法規出版株式会社.
- Propp, J., Ortega, D. M., & Newheart, F.(2003). Independence or interdependence:Rethinking the transition from “Ward of the court”to Adulthood. *Families in Society.*, 84, 2, 259-266.
- Shaw, I., and Glould, N.(Eds.). (2001). Qualitative Research in Social Work. London:SAGE.
- 下山晴彦.(1997). 臨床心理学研究の理論と実際—スチューデント・アパシー研究を例として. 東京：東京大学出版会.
- Smith, D.(2004). Introduction:Some Versions of Evidenced-based Practice. Smith, D.,(Eds.). Social Work and Evidence-Based Practice. London:Jessica Kingsley Publishers.
- Smith, M.(2009). Rethinking Residential Child Care : Positive Perspectives. Bristol:The Policy Press.
- 田垣正晋.(2008). これからはじめる医療・福祉の質的研究入門. 東京：中央法規出版株式会社.
- 谷口明子.(2004). 病院内学級における教育実践に関するエスノグラフィック・リサーチ —実践の“つなぎ”機能の発見. 発達心理学研究, 15(2), 172-182.
- 谷口明子.(2006). 病院内学級における教育的援助のプロセス. 質的心理学研究 5, 6-26.
- 渡部律子.(2009). ソーシャルワークの研究方法—ソーシャルワーク研究の発展に向けて. ソーシャルワーク研究. 35(2). 4-16.
- やまだようこ.(1988). 私をつつむ母なるもの—イメージ画にみる日本文化の心理. 東京：有斐閣.
- やまだようこ.(1997). モデル構成をめざす現場心理学の方法論. やまだようこ(編). 現場心理学の発想. 東京：新曜社.
- やまだようこ.(2000). 人生を物語ることの意味—ライフストーリーの心理学. やまだようこ(編.) 人生を物語る—生成のライフストーリー(pp. 1-38). 京都：ミネルヴァ書房.
- やまだようこ.(2001). 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス—「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に 質的心理学研究, 1, 107-128
- やまだようこ.(2006). 質的心理学とナラティヴ研究の基礎概念—ナラティヴ・ターンと自己物語. 心理学評論. 49(3). 436-463
- やまだようこ.(2007). ナラティヴ研究. やまだようこ(編), 質的心理学の方法—語りをきく(pp.54-71). 東京：新曜社.
- やまだようこ.(2010). 時間の流れは不可逆的吗?—ビジュアル・ナラティヴ「人生のイメージ地図」にみる, 前進する, 循環する, 居るイメージ. 質的心理学研究. 9. 43-65.
- やまだようこ・山田千積.(2009). 対話的場所(トポス)モデル—多様な場所と時間をむすぶクロノ・トポスモデル. 質的心理学研究, 8, 25-42.
- 矢守克也(2006). 語りとアクションリサーチ—防災ゲームをめぐる. 心理学評論. 49(3). 514-525.

(博士後期課程・日本学術振興会特別研究員)